

配列の資料とした。

- ③ 本校小学部が使用していた評価のための360項目到達度表を資料として検討した。
- ④ 小・中学部で独自に作成し使用してきた従来の教育計画の内容を検討した。
- ⑤ おおよその目安として、1段階を0歳～2歳とし、6段階を7歳～8歳程度の知的、精神的発達、成熟を予想し、配列した。
- ⑥ 養護学校該当児の各段階における身体的成長や生活経験についても、ある程度の子測をして、配列の中で考慮した。

また、各分野に設定した重点項目を、次の51項目とした。

- ① 自立化(10項目)起床と就寝、身なり、食事、排せつ、清けつ、入浴、整理整頓、健康なからだ、病気とけがの処置、生活安全。
- ② 社会化(20項目)一人遊び、集団遊び、あいさつ、友だちとの交際、鳥取県の状況、鳥取県と近くの県との関係、行事への参加、自由時間の利用、礼儀作法、係り当番の活動、集会などでの活動、学級学校のきまり、社会のきまり、交通機関、家のまわり、学校のまわり、わたしたちの町、政治と選挙、生産と消費、公共の施設。
- ③ 表現化(12項目)数、単位、図形、グラフ、絵画、制作、音声、文字、運動、リズム的表現、身近な動植物、身近な自然の事象。
- ④ 職業化(10項目)家族の一員としての態度、被服、食物、保育看護、住居、仕事の技能(農耕、園芸、養畜、木工、金工、窯業、紙工、印刷、縫工)、仕事の態度、進路への理解、買い物、金銭の管理と貯蓄。

ここに示した51項目は、指導しなければならない学習内容を示したにすぎない。言い換えると、この51項目の内容は、教育内容の基準を示したものである。具体的な学習展開では、いくつかの項目が統合され、再構成されて、表現化に視点をあてた学習展開が考えられなければならない。

2 表現化に視点をあてた本校の立場

(1) 表現化とは

表現とは、相手(対象)に何かを伝達するということである。伝達するという行為が、たとえ言語や身体を通して十分でなくても、相手の反応を期待している場合の活動は表現活動といい、他の活動と区別して考えることにした。例えば、奇声を発してひとりで走り廻っていたり、ひとりで静かに本を読んでいたりする。この場合、たとえ本人にとって、極めて充実した活動であっても、相手の心を動かそうとする意志が見られない。これは表現活動を引きだす素材であっても、本校の場合、区別して考えることにしたのである。

表現化の化とは、生きて働く力となる方法を身につけていくということである。従って、表現化とは、表現活動をすることによって生きて働く力となる表現方法を身につけていくということであり、

これは常に社会的な活動であるということができる。

このように考えると、本校で取り組もうとしている表現化には、段階別教育内容の分野としての表現化と、社会的自立を目ざす各分野を統合した表現化という2つの立場があることになる。前者は、基礎的な表現能力の育成に、後者は、その基礎能力を効果的に社会生活に活かすための表現活動の育成という立場である。

換言すると、分野としての表現化は、教育内容を通して、感覚的、身体的、精神的な能力の発達を促進し、生活化しようとする基礎的内容を含むものである。

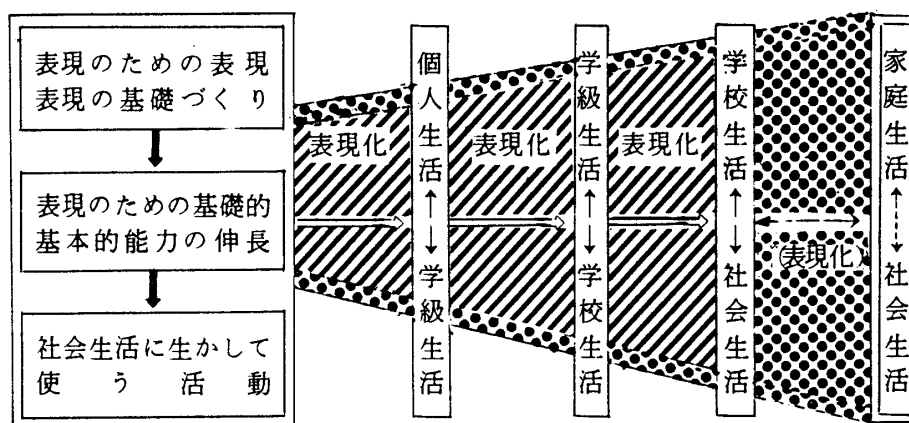
社会的自立を目ざす統合された表現化は、分野別教育内容を拡大発展させ、本校の教育目標を具体化し、実践化していこうとするものであるということができる。

この両者は、それぞれ分離したものではなく、不離一体の関係にあり、基礎的学習内容や能力に支えられて、社会的自立へ発展させていこうとする過程なのである。

(2) 表現活動の過程と表現化

表現化に視点をあてた活動では、豊かな表現活動が展開されなければならない。しかし、精神薄弱児の実態から考えて、表現活動そのものが理解できないという子どもたちが想像できる。

また、表現方法が極めて未熟な子どもたちも多いだろう。さらに、同じ表現でも上手な表現、下手な表現とそれぞれ個人差が見られるだろう。



このように、多様な姿が想像できる子どもたちの、表現活動の芽を引きだし、表現活動を豊かに育成するためには、上図に示す表現活動の過程を歩ませることが必要と考える。

子どもたちの表現活動は、表現活動そのものを通して基礎となる知識、技能、態度を身につけ、それぞれの過程の中で、未熟な段階からより高次の段階へと能力を獲得し、さらに社会生活の中で活かされていくものと考えている。

従って、表現活動の過程は、段階別教育内容の1段階から6段階へと、発展的に深まるものである。しかし、同時に、同じ1段階であっても、その段階の子どもなりに表現活動は発展的な深まりがなけ

ればならないと考える。

従って、表現化に視点をあてた学習では、表現活動の過程を追って発展的に深まるのであるが、その発展過程では、各段階でくり返し、くり返し、表現活動の過程を歩まねばならないということになるのである。

また、表現化に視点をあてた学習では、家庭生活とのつながりを無視しては成立しないと考えている。前頁の図は、表現化に視点をあてた学習が、終局的に家庭生活への自立を示しているのではない。表現活動の最初の段階から深い関連をもって学習が成立していることを示しているもので、矢印を←---→のように示したのもそのためである。

表現化に視点をあてた学習指導については、項をあらためて述べる。